

優秀賞

# シロツメクサを掴んで

茨城県 結城第二高等学校三年 西 紅音

私が「高校生」をしていたのは、今年の夏だった。夏休みなのに学校へ行き、部活動に励み、電車を乗り継ぎ大会へ行く。これぞ高校生。三年前、「高校生になりたーい」一心で慣れない固い制服に袖を通し、受験へ行った日には想像も出来なかったほど、今が楽しい。

私は中学時代、学校へ行っていなかった。いわゆる不登校だ。とにかく学校が嫌いだった。勉強、校則、サイズの合わない制服も、見知らぬ同級生も、窮屈で、どうしても好きになれなかった。小学生の頃からの友人とも連絡を取らなくなり、親と接することさえ億劫で、自暴自棄となっていた。そんな私が高校生になりたいと思えたのは、ふたりの幼馴染の存在があったからだ。小学校五年生の時、私は東京から栃木へと引っ越しをした。それに伴い、学校も変わり、周りの環境も大きく変わった。しかし、ふたりだけは変わらず仲良くしてくれていた。一年に数回、家族で幼馴染の家を訪ねる。幼馴染の部屋の本棚が増えていく本、参考書、使い古してぼろぼろになっていく教科書ノート。私に焦りを覚えさせるには十

分だった。何より学校の話を楽しそうにする二人に、気を遣わせてしまうのが一番辛かった。クラスメイトから言われる「学校へおいで」「まってるよ」の言葉や、親からの叱咤よりも、ふたりに悲しい顔をさせている罪悪感のほうが、遥かに私を奮い立たせた。それでも制服は着られず、週に数回、私服で放課後の学校へ面談に行っていた。数年ぶりに制服を着たのは、曾祖母のお葬式だった。新品のような制服を三年生の私が着るのは少し恥ずかしかったが、自分が思うより、窮屈でなかったことを覚えている。

高校に入学してからは、たくさんの経験をすることができた。家庭クラブ総会の全校生徒の前での決算報告。何かに積極的に参加することへの畏怖心が少なくなったように思う。一年・二年生と参加した、五日間の保育園でのボランティア活動。将来の夢を明確に考えられるようになったのはこの時からだ。初対面の私を受け入れ、「先生」と呼んでくれる子どもたち、先生。はじめはもじもじしていた女の子が、その日の終わりにはシロツメ

クサを手渡して、自分から私の手を握ってうれしそうに笑ってくれた。一年前には一人で眠れず暴れていた女の子が、次の年には自分で布団を敷いて、一番に寝て一番に起きられるようになっていた。少しずつ、けれど確実に変わっていく子どもたちを見るのはとても楽しく、微かに感動さえ覚えた。たった五日間だけでなく、もっと長い間、皆の成長を見たい。保育士になりたいと強く思った。

そして、俳句甲子園。始まりは突然で、授業の終わりに先生に勧誘を受けた。「君は国語力がある」と褒められたことが嬉しくて、誘われるがまま部室に行くと、気が付いたら参加することになっていた。夏休みの宿題でしか考えたことのなかった俳句を考えるのは難しかったが、その分面白かった。自分の知らない世界など、いくらでもあるのだと実感した。「幼子の寝相はまるで蛙かな」という俳句に出会った。保育園で見たお昼寝中の子どもたちを思い出した。俳句では、子どもへの愛だとか、可愛らしさ、ユーモラスな光景を詠んでも良いのだと知った。自分の実感を詠むからこそ共感を得られる。俳句甲子園出場にあたり、たくさん俳句を勉強し、自分でも作ってきた。メンバーと練習を重ね鑑賞内容を共有した。最初は噛み合わなかった意見が、回数を重ねるごとにまとまった。新しい意見が加わるたびに鑑賞は深まり、俳句を一読するだけで自分たちの句の良さがわかるように



なっていた。それは、全国の舞台でも例外ではなかった。想像もしなかった質問、到底思いつくことのできない秀逸な句。質疑を重ねるたびに句のイメージは更新され、自分の中で腑に落ちるきっかけとなる言葉が投げかけられる。予想外の言葉を受け、自分の中で固まった考えが崩れる瞬間にこそ、自分の内面的な成長ができるのだと感じた。複数の人が一つの俳句を見たとき、感じることや思いが一つであるとは限らない。俳句甲子園を通し、物事を多面的にみることや自分の見解を深めることの重要性、そしてそれを伝えるための技術、コミュニケーションなど、様々なことを学ぶことができた。自分の意見を伝えることが苦手だった私に、鑑賞文という形で相手に伝える方法を教えてくれた先生。あの時誘われるがままに付いて行ってよかった。

私の人生は、幼いころの青写真などあてにはならず、予想もしなかったことばかりが起きていく。不登校も、保育士を目指すことも、俳句甲子園に出場したことも、今こうしてこの作文を書いていることも、予想外の出来事だった。これまでのことを後悔したことはない。「自分の選んだことは、自分で責任を取らなければならぬ」という祖父の言葉を胸に、これからも日々精進していこうと思う。